

国語国文学会だより



No.32

2005. 4

日本文学科卒業生の会

国語国文学会 平成十六年度秋季大会 研究発表・公開講演会 報告

平成十六年度秋季大会を十一月二十七日(土)、百年館低層棟五階百五〇六教室にて開催しました。

◆午前の部(研究発表) 十時〜十二時
大伴家持の「哀傷長逝之弟歌」

本学博士課程前期修了

院三十五回生 今井筆子氏

伴蒿蹊の画賛

本学博士課程後期二年次 田代一葉氏

尾崎翠作品の映画性

―『第七官界彷徨』にみられるモニタージュ―

本学博士課程全期修了

院四十二回生 明石亜紀子氏

◆午後の部(公開講演会)

義経伝説と能

本学助教授 石井倫子氏

珠玉の言の葉―一葉の作品と日記より―

朗読家 幸田弘子氏

懇親会 十六時四十五分〜十八時三十分

於 ウイミン

○幸田さんの公演に対して参加者から寄せられた感想をご紹介します。

ちから有る言の葉

関根 緑(旧44回)

国語国文学会秋季大会、今回は朗読家の幸田弘子さんをお迎えしての講演であつた。

幸田さんは現在、その道の第一人者として活躍されている。その日私達は、壇上に登場なさった着物姿の美しい幸田さんに先ず魅了された。ついで耳に入る第一声、そのあざやかな声の響きに誰もが圧倒され、次の瞬間、たちまちに幸田さんの語り口にひきこまれてしまった。当日は樋口一葉の「わかれ道」であつた。

一葉の作品は、幸田さんの朗読によって一つの世界を作りあげてゆく。語りが進むにつれ一葉の名作の舞台が目に見えてくる。ときずまされた一葉の美しい文章は、幸田さんの声の色、香りによって輝きをまし、聞く者を遙か昔にひき戻してくれるのだ。私達は、幸田さんの音声の中に浸りながら、次第に自分が作品の中に入りこみその人物となり主人公ともなつて動いてゆく。はて、この境地は何なのだろう。夢うつつの中で、ただ幸田さんの与えてくれる風景が、自分の中に広がってゆくのを感じる。語る者と聞く者の一体化とは、こういうことなのであろうか。

朗読は、語り手と聞き手の両者によって成り立つことではあるが、幸田さんの「語り」には強い引力があり、なみなみでない表現の力がある。それが聞く者の心を取りこにして想像の世界へと誘導してくれる。聞き手は、居ながらにして超越した時間の中に遊ぶことができるのだ。

これまで「読書」とは、書かれた文章を読むことにより成立するものと考えていた。「読解」ということばをそうした範疇で解釈していたが、耳からとらえていくというこの事実は、まさに新しい発見であった。そこには、音があり、ひびきがあり、人々の息づかいが聞こえる。と同時にその世界を生きている自分をも感じる事ができるのだ。これは、奇跡と言っても過言ではあるまい。耳から入ることばはそのまま心象風景を作り、その中を歩いている自分に思わすはつとする。これは私一人だけではなかったろう。幸田さんの朗読を聞かれたすべての人が、この感動を体験したにちがいない。そしてこれこそ幸田さんの「ことばの力」がなせるわざと考えるのである。

ことばは生きている。何気ない日常のことばでさえそれぞれ意義あることを思う時、ことばのもつ魅力と大切さを、これほど強く感じたことはなかった。それを気付かせ、目を開かせてくださった幸田さんの朗読は、私達にとつて珠玉とも言えるのではないだろうか。

一葉の日記

中田和子(院27回)

秋の日の一日、幸田弘子氏の講演と朗読を堪能した。とりわけ日記の朗読からは、夭折した天才女流作家、という単純な言葉ではとらえきれない一葉の、生き生きとした素顔が浮かび上がってきた。

「病人でも夏は暑い。かくばかり嫌なものとは知らざりき」

病床で綴った言葉だというが、これほどきつぱりと、しかもユーモラスでさえある言い回しをする人だったのか、と意外な思いがした。

また、その後毎日新聞のコラムに引かれていた「我に罪なければ、天地おそろしからず」の一節も気になった。どうやら一葉、若くして結核で世を去った才色兼備の悲劇のヒロイン、というだけではなさそうだ。

町の書店や図書館で探してみると『一葉青春日記』『一葉恋愛日記』(共に角川文庫)が見つかった。いずれも日記抄で、全文ではない。

古めかしい文体にやや取つきにくさを感じたものの、幸田氏の朗読を思い出しながら、少しずつ読み始めた。文体に慣れてくると、あとは一気に最後まで読んでしまった。

日記の一葉は、幸田氏が講演で語られていたように、金銭面で苦勞して、しかも決して卑屈

にはならない、真摯に生きた一人の魅力的な女性だった。耳の底に残る幸田氏の豊かな声に後押しされて、一葉の生きた時間をかいま見ることができたことに、改めて感謝の思いを深くする。

なお、筑摩書房の『樋口一葉集』にも、今回朗読していただいた『わかれ道』とともに日記が収められている。

『一葉青春日記』和田芳恵編注(角川文庫/昭和三一・十)

『一葉恋愛日記』和田芳恵編注(角川文庫/昭和三一・十一)

『樋口一葉集』(明治文学全集三〇/筑摩書房/昭和四七・五)

共に、素晴らしい時間を

倉田智子(新31回)

かねてより評判の高い幸田弘子さんの朗読を、初めて聞かせていただきました。そのお声は力強く、上質な木綿や麻の手触りのような確かさ。何の細工もない教室の中に、一葉の世界を瞬時に創り出されました。

口語文体でないにもかかわらず、違和感なく生き生きと語られ、聞き手の心をしつかりつかむ。これは書き手一葉と、語り手幸田さん双方の力があつてこそと思われました。

音読の効果については、最近多くの先生方が

推奨していらつしやいますが、幸田さんのお書きになられた『朗読の楽しみ』（光文社刊）も、ご一読されることをお勧め致します。音読は子供の知育や老人の呆け防止等に良いというような損得レベルのものではなく、長年朗読に取り組まれ、母国語である日本語を大切にし、文学を愛していらしたことが伝わってまいります。私も当日買い求め、ちやっかりとサインもしていただきました。

さらに講演会の後に開かれる懇親会は、卒業生にとつて他のカルチャースクールなどでは味わえない、女子大ならではのものです。今回は後藤学長がスピーチの中で、一葉が源氏物語を愛読していたことから、その影響や共通点など、今後の研究のテーマのヒントにもなるようなことにも触れて下さいました。何と贅沢なことでしょう。

又、附属校でご指導いただいた先生方とも、卒業生の会会員同士として懐かしくご一緒させて頂いただけで、ただただ幸せな一日でした。

ひとりでも多くの同窓の皆様、この至福の時を過ごしていただきたいと存じます。



義経伝説と能 講演要旨

本学助教授 石井倫子

悲劇の英雄としての義経像は後にさまざまな文芸作品の中に取り込まれ、「判官最良」という言葉を生み出すに至った。『平治物語』で語られる常盤母子の悲語は貴種流離譚とたやすく結びつき、また『義経記』で描かれる義経の壮絶な最期は本地物とも一脈通ずるところがある。

このようなところから中世芸能である能の中にも、義経伝説に取材した、いわゆる「判官物」と呼ばれる一連の作品群が存在している。ここでは判官物の能の特徴について考えてみたい。

世阿弥は能作の手引書『三道』で、「舞歌二曲の態をなさざらん人体の種ならば、いかなる古人・名匠なりとも、遊樂の見風あるべからず」と述べている。実際、『平家物語』を本説とする世阿弥の修羅能は、敦盛・清経・忠度など唱歌や管絃に縁のある平家の若公達や実盛・頼政などの武士をシテとしており、単に修羅道の苦患を見せるのではなく、風雅な趣を添えるような工夫がなされている。そのような中で、『申楽談儀』にも名がみえる（屋島）は、『平家物語』巻十一「弓流」に焦点を当て、花鳥風月には縁の薄いはずの義経を我が名を借しみ弓に執着する人物として描き出し、修羅能に「遊樂の見風」を与えることに成功した意欲作といえるだろう。

世阿弥以外の能作者による判官物の能は、以下を見てもわかるように、『平家物語』の世界からは離れて『義経記』に取材している作品が圧倒的に多い。

（巻一）

- ・牛若貴船詣の事…（鞍馬天狗）（笛の巻）
- ・吉次が奥州物語の事…（関原与市）

（巻二）

- ・鏡の宿吉次が宿に強盗の入る事…（烏帽子

折) (熊坂)

(卷三)

・義経弁慶君臣の契約の事…(橋弁慶)

(卷四)

・土佐坊上洛の事…(正尊)

(卷五)

・静吉野山に捨てらるゝ事…(船弁慶)(吉野静)

・忠信吉野山の合戦の事…(忠信)

(卷六)

・忠信最期の事…(愛寿)

(卷七)

・如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事…(安宅)

(卷八)

・嗣信兄弟御弔ひの事…(摂待)

・秀衡が子共判官殿に謀反の事…(錦戸)

牛若時代の義経が華々しく活躍する(橋弁慶)

(烏帽子折)(鞍馬天狗)などを別にすると(こ

のような能が作られる前提として、座に器量・

技量共に優れた子方がいることが挙げられる)、

これらの作品では義経の存在を全面的に打ち出

してはおらず、後ジテが屋島の合戦の様子を再

現してみせる(屋島)とはかなり違った印象を

受ける。本来は成年であるはずの義経をあえて

子方として舞台に登場させ、ワキやツレなどに

観客の視線を集中させる能作法は、むしろ弁

慶・静・忠信など彼をサポートする人々に重要

な役割を担わせているかのようである。

勿論、これは能に素材を提供している『義経記』自身が、英雄としての義経ではなく、悲劇の主人公としての所謂「無力なる御曹司」「家臣に守られる御曹司」の姿を強調していることと

もあながち無関係ではなからう。しかし、能はそこから一步進んで、周囲の人々を動かしていくきつかけ、いわば扇の要として義経を位置付ける。たとえば(吉野静)や(忠信)(愛寿)(錦戸)といった、義経その人が舞台に登場しない

作品でさえ、「主君への忠義」という主題を通して義経の存在が透けて見えるのであり、不在により却ってその存在を観客に強く印象付けることに成功している。そして、これこそが「判官物」と呼ばれる作品の最大の特徴なのである。

報告

自主ゼミ

○古代中世文化論

『和漢朗詠集』を読む二〇〇四年一月〜十二月
テキスト

「和漢朗詠集」川口久雄 講談社学術文庫
成立は寛弘九年(一〇一一)ころ。選者藤原公任の審美眼によつて集められた和歌と漢詩の佳句を取り合わせた和漢の珠玉の歌・句八百余首が、朗詠を目的として、整然と配列され、ただちに検索、鑑賞、活用できるように整理され

た詞花集(アンソロジー)で、一条帝時代の文化的総決算といわれる。

和歌については勅撰集に入ることによつて、漢詩文については朗詠集に採り入れられることによつて作者の知名度が高められた。

朗詠に正式な譜を付けたのは源雅信が始祖とされ、朗詠の根本になる七首が決まり(朗詠根本七首)以後源家流と藤家流に分かれて多くの曲がつくられ伝承されたという。

朗詠集は日本の漢詩文に影響を与えたのはもちろん、平安後期から中世の和漢混交文で書かれた『海道記』『東関紀行』『方丈記』、唱導文芸、『平家物語』などに与えた影響は数えきれない。物語の中にも朗詠の場面が現れる。その場にふさわしい秀句や佳句を選んで朗々と詠唱し、その場の情感を盛り上げてくれるものとして尊重され、競い合ったのである(宇津保物語・枕草子など)。しかし勅撰集では重要な部立てである「恋」はここでは一朗詠題にすぎない。恋は人まえて堂々と朗詠するものではなかったらしい。平安朝の形式詩では対句の巧みさによつて名声を得ることも可能で、それが出世にかかわることもあった。朗詠集の成立は時代や社会の要請に応じたもので、和漢の才を兼備した公任こそは選者としてふさわしいとされた。

院政期には管弦に合わせて盛んに行われた朗詠も次第に貴族から僧侶、一般庶民から遊女、

白拍子が宴席でうたうようになった。僧侶の唱導書や今様の中にも朗詠集の秀句が、また中世の宴曲や謡曲などの詞章の至るところに採り入れられ日本の芸能に影響を与えた。

「一つの考察」 和歌は端的にいうと、自分の心に感じたものを言葉に出す。目をつむって誰かが詠じるのを聞くと、その情景がひとりで心の中にひらいてきます。しかし漢詩は自分の感情を直接に表すというより、漢字の字くばり、字と字の関係（対句など）を第一として作られたのではないか。和歌と漢詩はそのへんが根本的に違っているのではないか。耳で聞いて心で心象風景をつくりながら叙情というものを自分が感じとっていく。漢詩は文を見て、字のバランス、配置、使われている言葉、そういうものに注目して行かないと、漢詩の機微は体の中に入っていないのではないか。

和歌は感覚で受けとってゆきますので、成熟した意識がなければ十分に受容されない。漢詩は本当に歌いたいものが100%表現されているかどうか、という点。両方のもの足りなさというか隙間というか、その隙間を和歌と漢詩を並べることによって空白を満たすことがなにか出来ないか、というとき非常に類型的なもの、例えば「春」なら春を詠んだ和歌と漢詩を持ってきて、その隙間を埋めてゆく、というようなことが当時考えられたのではないか。和文と漢

文を融合させて一つの世界をつくっていかう、それが朗詠集の出発点になったのかな、と感じたのです。

（次のテキストは『無名草子』です）

（まとめ・山田佐和子・旧46回）

○皇女研究会

『源氏物語』をはじめ、平安文学には皇女の姿がしばしば見られます。物語の皇女と実在の皇女とは何処が一緒で何処が違うのか—そんな単純な好奇心から始まった集まりが「皇女研究会」です。

しかし、その手掛かりとなる史料を初めて見たときは一同呆然。大多数の皇女が残す記録は死亡記事だけです。そこには死亡日時と父である天皇の名前の他は、せいぜい母親の名前とその出自くらいしか載っていません。

……ここからがパズルのピースを合わせるような作業の始まりです。当時、皇子女の養育は母方の一族が盛りたてるものだから、皇女の外祖父はどんな経歴の持ち主か、一族にはどのような人物が居るか等々を調べ、皇女の母親の入内時期を想定し……そうしているうちに本当に臆ではありませんが、次第に皇女の実像に迫ることが出来ます。例えば「一族は美男美女揃いで漢詩文の素養が高い。経済的にも裕福とは言えないまでも、決して困窮してはいない。つま

り、皇女も多分、美女で、つましいながらも文化的雰囲気包まれて生涯を送ったのだらう」と。

ところが史料を調べていると思うがけぬ困難も生じてきました。皇女の外祖父が歴史上の人物であつたり、一族が事件に巻き込まれたりすると、史料の記事（漢文）は長大になり、その修辭はとても私たちだけで読み解くことは無理でした。そこで月に一回の皇女研開催日の午後、講師の先生をお招きして「国史を読む会」を始めます。天皇の寵妃と密通したことがバレて左遷された弟を持つ女御の話など、堅苦しい国史のイメージとは異なる記事も散見しています。聴講だけでも一緒に如何ですか？

問い合わせ先 柳澤理恵子（新37回）

○四五—八四—一六五二五（留守電）

DZ106134@nifty.com

文学散歩の道のり

秋の恒例行事として好評の文学散歩、この間の記録を辿ってみると――

- 1 平6 千駄木・根津（隅外・漱石）
- 2 平7 根津・谷中（露伴『五重塔』）
- 3 平8 田端文士村（龍之介）
- 4 平9 隅田川・向島（荷風）
- 5 平11 東大三四郎池（漱石）
- 6 平12 目白台（成瀬記念館）
- 7 平13 芭蕉庵辺り（奥の細道）

8 平14 雜司が谷界限(三角寛・菊池寛)

9 平15 本郷界限(樋口一葉他)

と、趣意にとみ、意外に知らない東京の懐かしい界限を散策してきました。企画をたて、必ず現地を事前に歩かれた新妻佳珠子さんの努力が、成功の大きな要因といえます。

ご要望もあり、また今年は新しい企画をと考えております。

国語国文学会卒業生の会より

お願い

皆様御承知の通り、当会は発足の時より「総務」「企画」「編集」「会計」の四部門を以て運営して参りました。

しかしこのところ委員の方々に、お仕事上の変化、又一身上の御都合等が生じ、働いて頂ける方が減りまして大変苦しい運営を迫られて居ります。仕事は国語国文学会の春秋の大会の運営のお手伝い、年二回のたよりの発行、及び郵便物の発送等で、年数回集まって居ります。

どうぞお手伝い頂ける方は児玉までお電話を頂きたく、よろしくお願い致します。

電話〇四四―八四―四一〇七五二

総務 児玉久美子

会計係より、お知らせとお願い

会の活動は、皆さまの会費により維持されております。年間会費一千元。夏にお届けする「たより」に振替用紙を同封いたしております。

ここ何年か、会費納入率が減少しつづけ、経費削減のため、「たより」・「はがき通信」の発行回数も減らしました。また、発会以来、会費未納でも三年間は「たより」・「はがき通信」をお送りしておりますが、本年度より、それを一年早め、会費未納でも当年と次年は発送いたしますが、三年目より中止させていただきますので、ご了承ください。

納入方法などにつきましては、会計でも検討しております。詳しくは次号でご報告いたします。

春季大会のご案内

▼日時 平成十七年六月二日(木)
十三時より

▼場所 八十年館八五一教室(予定)

▼第一部 総会

▼第二部 学生による研究発表

自主ゼミの活動報告等を予定

◆編集より

石井倫子先生の「義経伝説と能」のご講演は、要旨掲載のお許しをいただき、参加できなかった方だけでなく、当日出席された方も、大変興味深くお読みいただけたことと存じます。ご講演は多くの映像を駆使され、能に馴染みのなかった者にも理解しやすいように工夫して下さっており、編集担当の委員としては、先生のお心をもっとお伝えできるようにしたいと痛感いたしました。

もちろん今まで通り「たより」は、より一層充実したものを目指してまいります。若い会員の方からの「ホームページも利用したら良いのでは……」というようなお声にも耳を傾けて、伝統を守りつつ新しい時代にも応えられるように努力してまいりたいと存じます。

春季大会の日程も決まり、新年度の活動が始まりました。多くの方が大会に出席されて、ご意見をお聞かせ下さることを、委員一同楽しみにしております。

二〇〇五年四月一日

発行・日本女子大学日本文学科

国語国文学会卒業生の会

〒一一二・八六八―

東京都文京区目白台二一・八―
日本女子大学 日本文学科内